

●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 7-10

スキンシップ

目次

要約	2
はじめに	4
1. 子どもたちの自己像とその周辺	5
●自分はどうな子か	5
●成長への欲求と性役割の受け入れ	6
●両親への態度	8
2. 親とのスキンシップ	10
●さまざまな姿	10
●性差と学年差	12
3. 親から受けている世話	16
●2種類の世話	16
●性差と学年差	18
4. 親への愛着	22
●アタッチメント	22
●何がきずなを作るか	25
●スキンシップ、親からの世話との関わりで	28
5. 子どもの成長欲求との関わりで	34
子ども研究ノート ⑨	
遊び	深谷昌志……37
資料1 調査票見本	……42
資料2 学年・性別集計表	……48

調査レポート／スキンシップ

要約



①調査の目的

思春期の入口にある子どもたちが残している幼さ——親への甘えや依存の側面と親のとり扱いを中心に、この時期の親子関係の一端を明らかにしようとするものである。



②低い成長欲求

早くおとなになりたい子は40%、いつまでも今のままでいたい子は37%、幼稚園時代に帰りたいた子が23%。男子と女子では女子のほうがやや退行的である(図2)。



③好かれている両親

父親を「とても好き」な子は60%、母親は67%、逆に「あまり・ぜんぜん好きでない」子は6%と3%しかない(図4)。



④寝室の状況

まだおとなと一緒に寝ている子が20%もいる(図7)。

調査概要

1. 調査主題 スキンシップ
2. 調査視点 思春期にさしかかった子どもたちの甘えや依存性とそれをめぐる親との関係を探る。
3. 調査項目 母親・父親からしてもらう身のまわりの世話について／母親・父親とのスキンシップについて／日常生活での親との接触についてなど

東京学芸大学教授 深谷和子

お茶の水女子大学大学院生 佐々木智子

⑤親とのスキンシップ

父親より母親とのスキンシップが強いが、その程度にはバラツキが大きい(図8)、また女子のほうが強い(図9、図10)。

⑥身体的・心理的世話

同じく母親のほうによく世話をしてもらっているが、領域や性別によって少し差がある(図13～図20)。

⑦親への愛着(アタッチメント)

親へのアタッチメントは女子に強く(図21)、またその形成要因として、きょうだい中の位置、母親を好きな度合いなどが関わっている(表1)。

⑧母子(父子)関係との関わり

母親(父親)を好きな子のほうがそうでない子より、よく世話をしてもらっている。またスキンシップとの関わりも同様である(図23～図28)。

⑨成長欲求との関わり

成長欲求の弱い子(退行的な子)ほどスキンシップも世話も十分受け、かつ親への愛着も強く示す(表2～表4)。

⑩まとめ

子どもと親との心理的きずなを形成する(親子関係を形成する)ためには、乳幼児期に十分なスキンシップを与え身体的・心理的世話をすることが必要であろうが、子どもを自立させ、おとなにしてゆくためには、発達段階のどこでそうした接触をへらししていくのか、打ち切っていくのかがむずかしい課題であろう。

4. 調査時期 昭和62年6月
5. 調査対象 小学4・5・6年生
6. 調査方法 学校通しによる質問紙調査

7. サンプル数 (人)

学年/性	男子	女子	計
4年	117	125	242
5年	286	293	579
6年	295	295	590
計	698	713	1,411

＊はじめに＊

最近にかと思春期の子どもたちの起こす問題が、注目を集めている。思春期は第二次性徴の発現をもって始まりとするのだから、考えてみると『モノグラフ・小学生ナウ』の調査対象の子どもたち、すなわち小学校4・5・6年生は、まさに思春期の入口、もしくはその中に足を一步踏み入れた時期の子どもたちということになる。そうしてみると、どこかおとなを感じさせられる面をのぞかせながら次の瞬間には、やはりまた幼くて子どもっぽい動作をしたりなど、この年齢の子どもたちの姿はプリズムのようでもある。

このレポートは、そうした時期の子どもの中にひそむ幼さや、子どもっぽさの面に目をこらしてみようとするものである。思春期にさしかかったとは言いながら子どもたちの中に、今なお子ども時代の名残りとも言うべき側面がどのくらいみられるのか。以下は子どもたちの甘えや依存性と、それをめぐる親たちのとり扱いを明らかにしながら、この時期の親子関係の一端に接近してみることを企図している。

1. 子どもたちの自己像とその周辺



自分はどんな子か

まず図1は子どもたちの中にある「自分」像である。直接今回のテーマとは関わりがないかもしれないが、正直に言って、まず気になる「成績」の自己評価を探ってみよう。多少とも「勉強が得意」と言っているのは24%、男子と女子では男子31%、女子18%で、この開きはかなり気になるところである。巻末の集計表によれば、4、5、6年と進むにしたがって、この数字は27%、25%、23%と少しずつ低下していく。

では「しっかりした子ですか」とたずねてみ

ると、多少とも肯定する子は34%と成績についてよりもかなり多い。とは言っても逆に「しっかりしているとは思わない」と言っている子が約6割にのぼるわけだから、それほどどっしりと安定した自己像と言うわけではなさそうである。しかし「甘えん坊ですか」と聞かれば、肯定する者は19%と他のどれよりも低い数字である。「もう子どもじゃない」という気持ちはあっても、まだ自信がもてるほどではない、というところだろうか。

図1 自己像

		(%)			
		とても思う わりとそう思う	あまりそう思わない		ぜんぜんそう思わない
勉強は得意か	全体	5.8	18.5	51.5	24.2
	男子	8.5	22.3	47.6	21.6
	女子	3.0	14.8	55.5	26.7
しっかりした子か	全体	8.0	25.9	53.0	13.1
	男子	11.6	26.6	47.9	13.9
	女子	4.4	25.1	58.1	12.4
甘えん坊か	全体	4.2	14.4	40.1	41.3
	男子	3.5	10.5	36.8	49.2
	女子	4.8	18.2	43.4	33.6

成長への欲求と性役割の受け入れ

図2は成長欲求をみたものである。「早くおとなになりたい」子は40%だけで、残る6割は今のままか昔に戻りたいというわけである。子どもたちの成長欲求が弱くなった傾向は、折にふれて指摘されるものの、こうした結果をみているとやはり気になってくる。図の下の性別をみると、わずかながら女子のほうが成長欲求が弱く退行的である点がみられるのはどうしたわけか。また巻末の集計表によれば「おとなになりたい」子は4年から5年、

6年にかけて46%、41%、37%と減少している。

図3は性役割の受容度をみたものである。自分の性別を受け入れている子は男子で93%、女子で68%。戦後40数年を経ても、やはり女性役割のほうを価値的でないとする女の子たちが結構いることがわかる。男女平等をほぼ達成したとされるスウェーデンなど北欧の国々なら、この数字はもっと接近したもののだろう。

図2 成長欲求

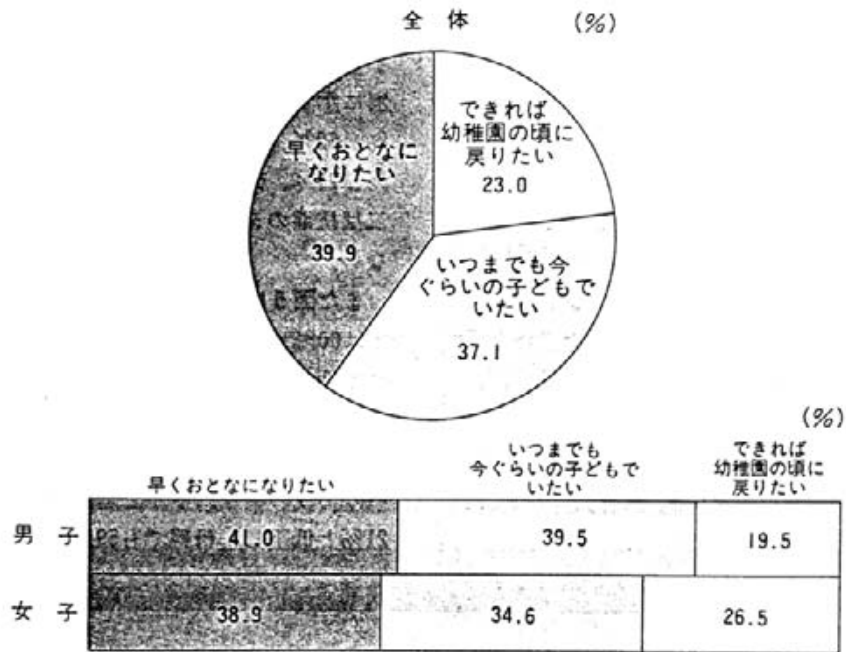
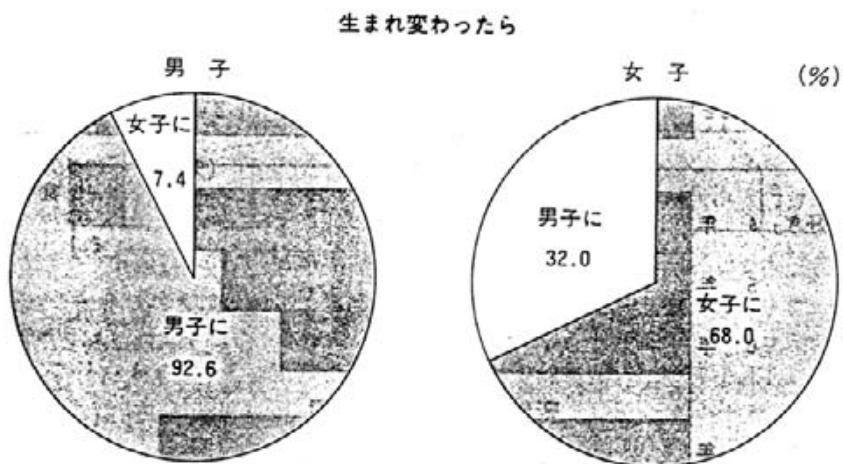


図3 性役割の受容



両親への態度

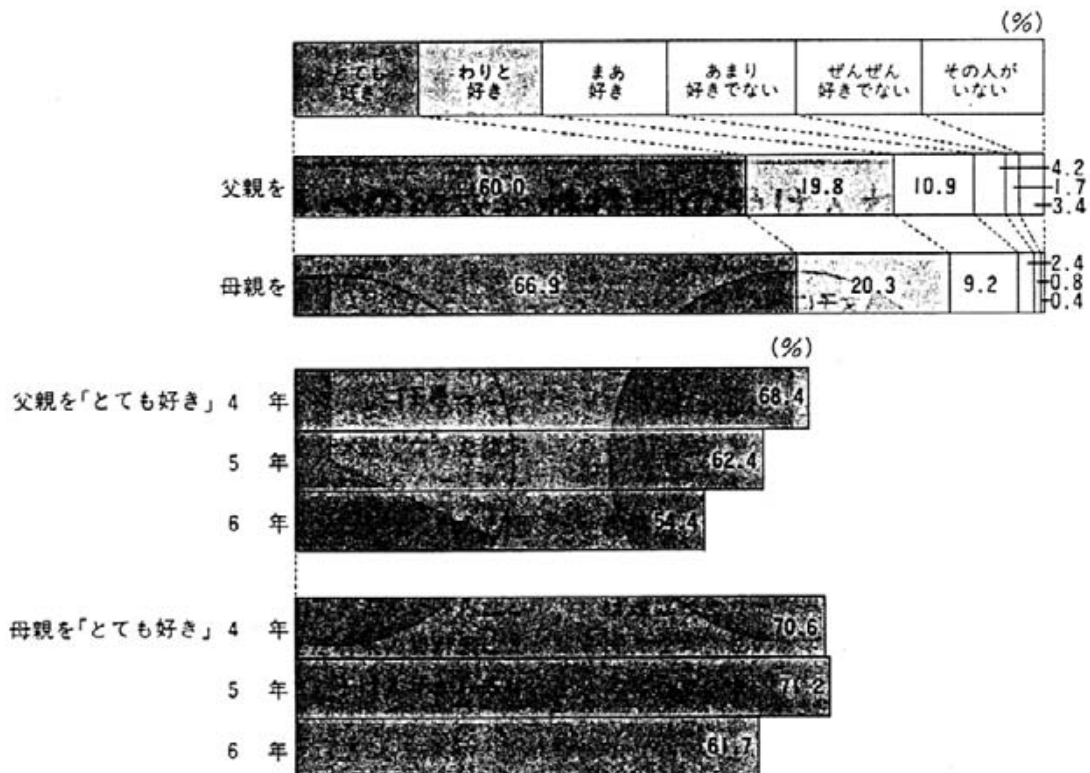
思春期から青年期にかけては第二反抗期であり、両親への感情や態度も次第にネガティブなものになっていくとされる。この点を見ようとした図4によれば、両親を「とても好き」な子は父親については60%（男子56%、女子64%）、母親を「とても好き」な子は67%（男子56%、女子78%）と、大きな割合を示す。父親と母親とでは母親のほうが好かれ、かつ男子より女子のほうが「両親を好き」な子が多い。この数字は「とても・わりと・まあ好き」まで含めると父親で91%、母親で96%にも達してしまう。

図の下に「とても好き」な子の割合を学年

別に示した。父親については学年を追って68%、62%、54%と低下し、母親についても71%、71%、62%と低下する。このあたりに第二反抗期のシッポが見えた感じもしないではない。

また図5は両親と話す度合いである。父親とは60%、母親とは84%が「とてもよく・わりと話す」と言っており、かなり疎通性があるようにも思われるが、これも「とてもよく話す」を例にとると、巻末の集計表によれば数字は父親の場合、学年を追って32%、24%、21%と低下し、母親でも59%、52%、52%となって、1年ごとに子どもたちが親に口を閉

図4 両親を好きか



ざしがちになる傾向がみえている。

次に図6は食事のときの同席者だが、朝食では「1人で」21%、「子どもだけで」18%と、おとなのいない食卓が目につく。さすがにその数字は夕食では大きくへって2%と5%となる。しかし少ないとは言ってもこの数

字は、なにか胸をつくものがある。

次に図7は誰と寝ているかである。住宅事情のせいか、この年齢になってもまだおとなと同じ部屋で寝ている子が20%もいるのは、問題だろう。

図5 両親との対話

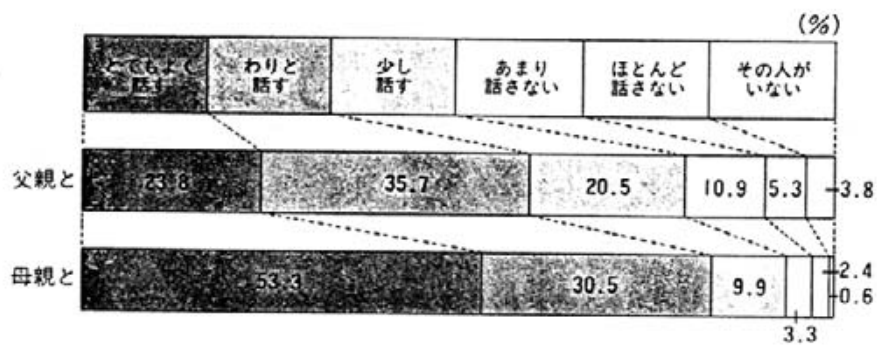


図6 食事のときの同席者(ふつうの日)

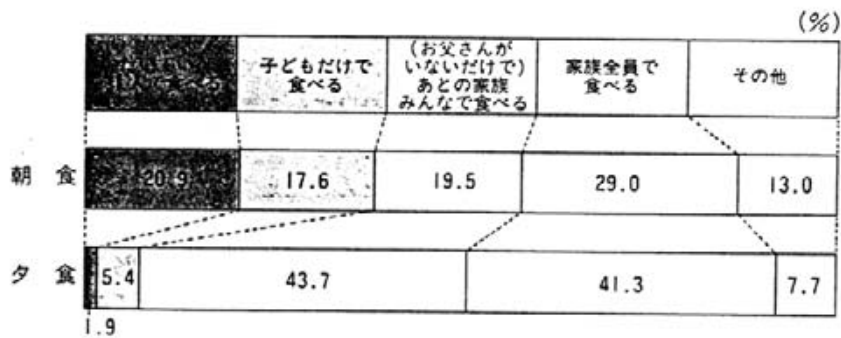


図7 就寝時の状況



2. 親とのスキンシップ



さまざまな姿

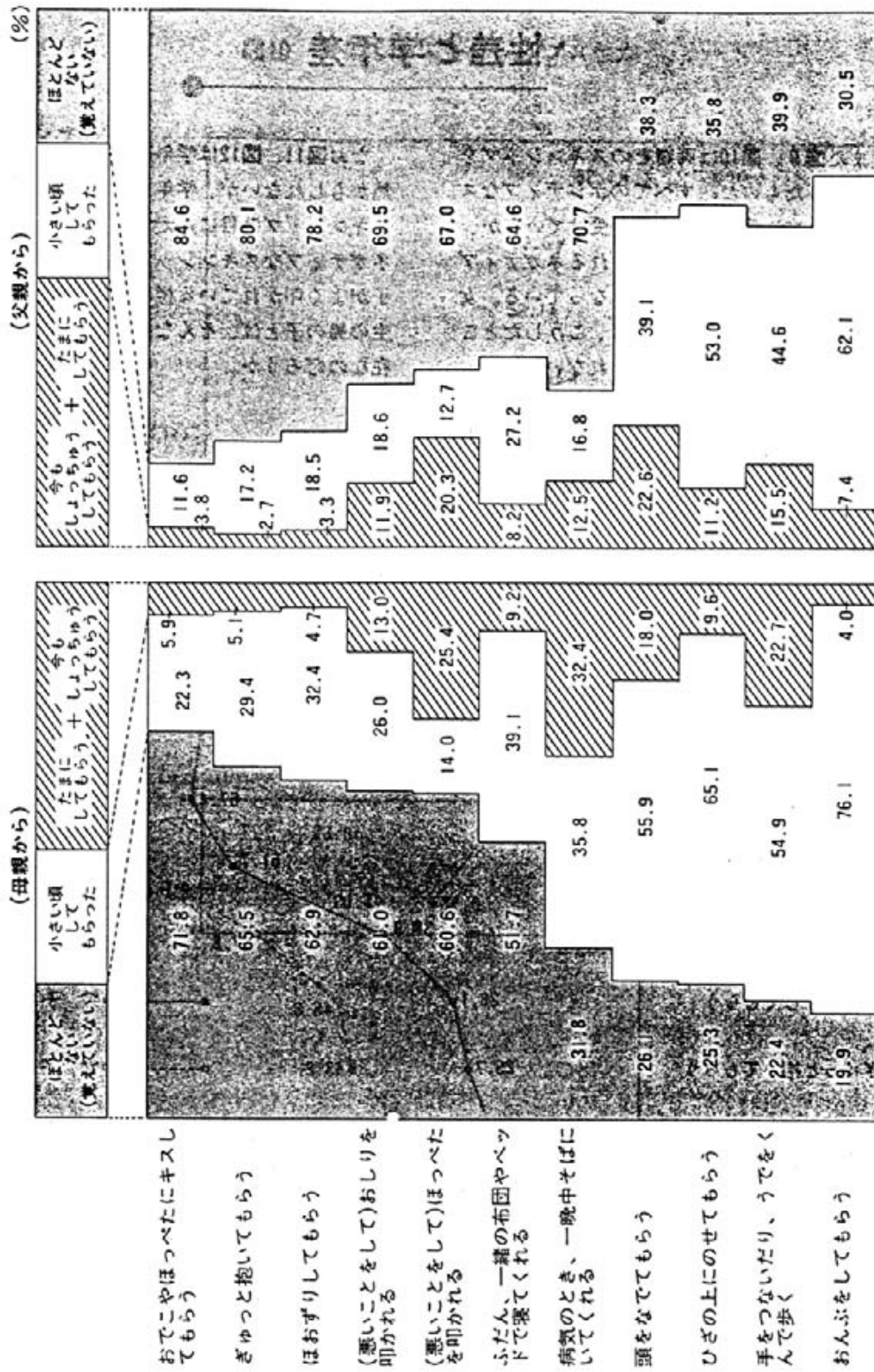
スキンシップとは文字通り皮膚を通しての接触である。子どもが幼いときはこれが親との重要なコミュニケーション手段であり、また精神的安定感を得る手段にもなる。

しかし子どもが成長するにつれて、親たちは少しずつ子どもとの接触のしかたを変えていく。皮膚にふれなくとも、まなざしや温かい言葉で子どもは安定するようになる。しかしおとなになっても、握手や肩たたきを始めとして、恋人間の愛情表現にみられるように、スキンシップは依然として大切な愛情表現の方法である。

さてこうしたスキンシップを子どもたちは、どのくらい体験しているのだろうか。図8によると、父親と母親とではむしろ母親とのスキンシップが多いものの、「覚えていない」とする者の割合が結構多いこと、また一部で

はあるが現在でもかなり幼児的スキンシップを受けている者もみられ、その分散は大きい。たとえば「ぎゅっと抱いてもらったこと」をほとんど覚えていない者は、母親から66%、父親からは80%だが、「今もしょっちゅう・たまにしてもらおう」は5%と3%、巻末の集計表によれば6年生でも、「今もしょっちゅう母親にぎゅっと抱いてもらおう」者は0.5%、200人に1人はいることになる。これが「ひざの上にのせてもらおう」になると、「今もしょっちゅう・たまにしてもらおう」は母親から10%、父親から11%となり、同じく巻末の集計表によれば母親に「今もしょっちゅうひざの上にのせてもらおう」者は6年生でも1%、父親からは2%もいる。この数値は、多少異常な世界という感じもしないではない。

図8 親とのスキンシップ

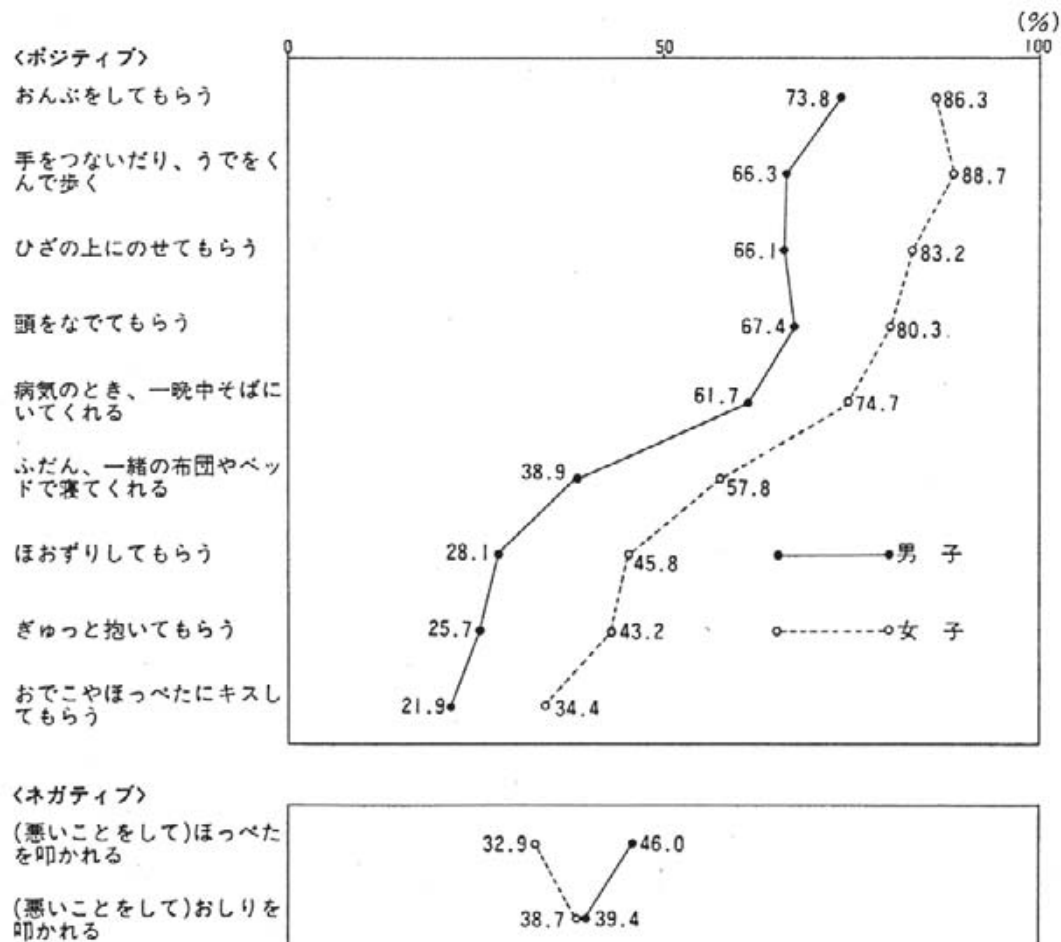


性差と学年差

また図9、図10は両親とのスキンシップを性差でみたものだ。すべてのポジティブなスキンシップは男子より女子が受けているが、ただし体罰のかたちで与えられるネガティブなスキンシップは男子に多くなっている。女の子の依存的性格や優しさは、こうしたところからも形成されるのかもしれない。

なお図11、図12は学年差をみたものだ。当然かもしれないが、学年を追うにしたがってスキンシップは目にみえてへって行く。例外はネガティブなスキンシップで、6年生の男子がよく叩かれている様子がみられる。6年生の男子の子とは、そんなにも手に負えない存在なのだろうか。

図9 母親とのスキンシップ×性別



「ほとんどない(覚えていない)」を除く割合

図10 父親とのスキンシップ×性別

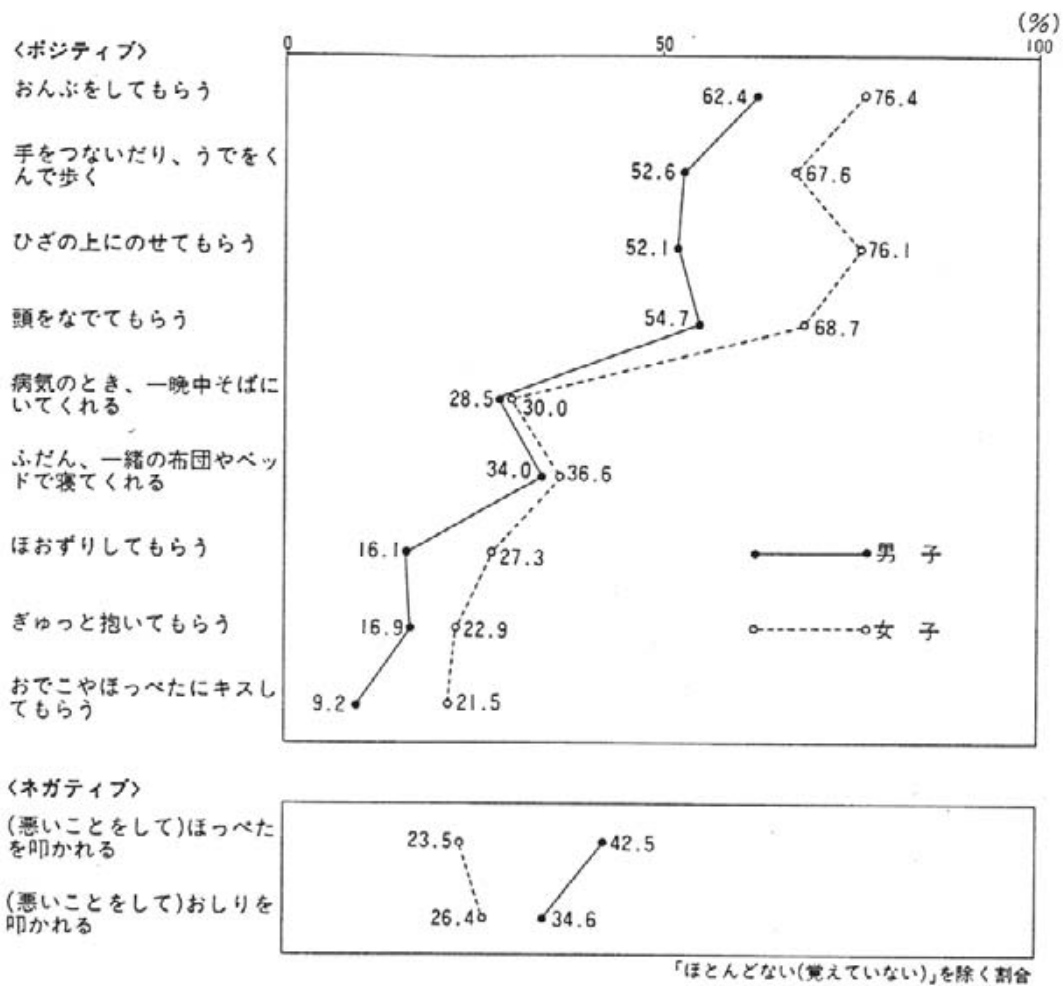


図11 母親とのスキンシップ×学年

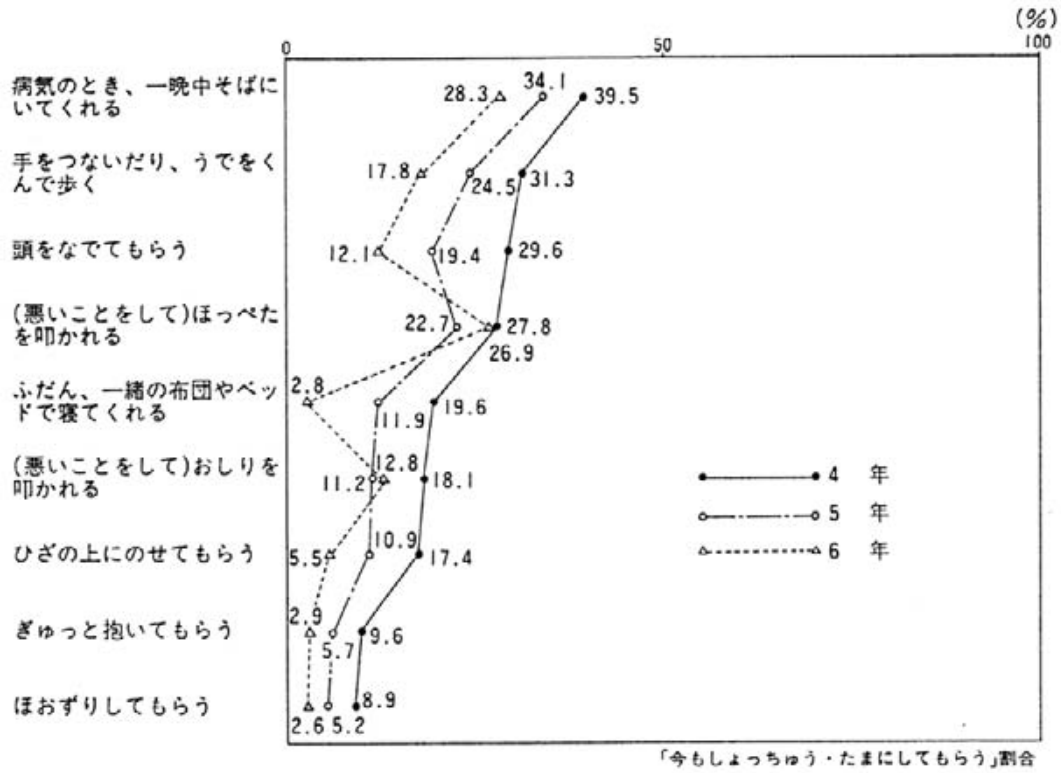
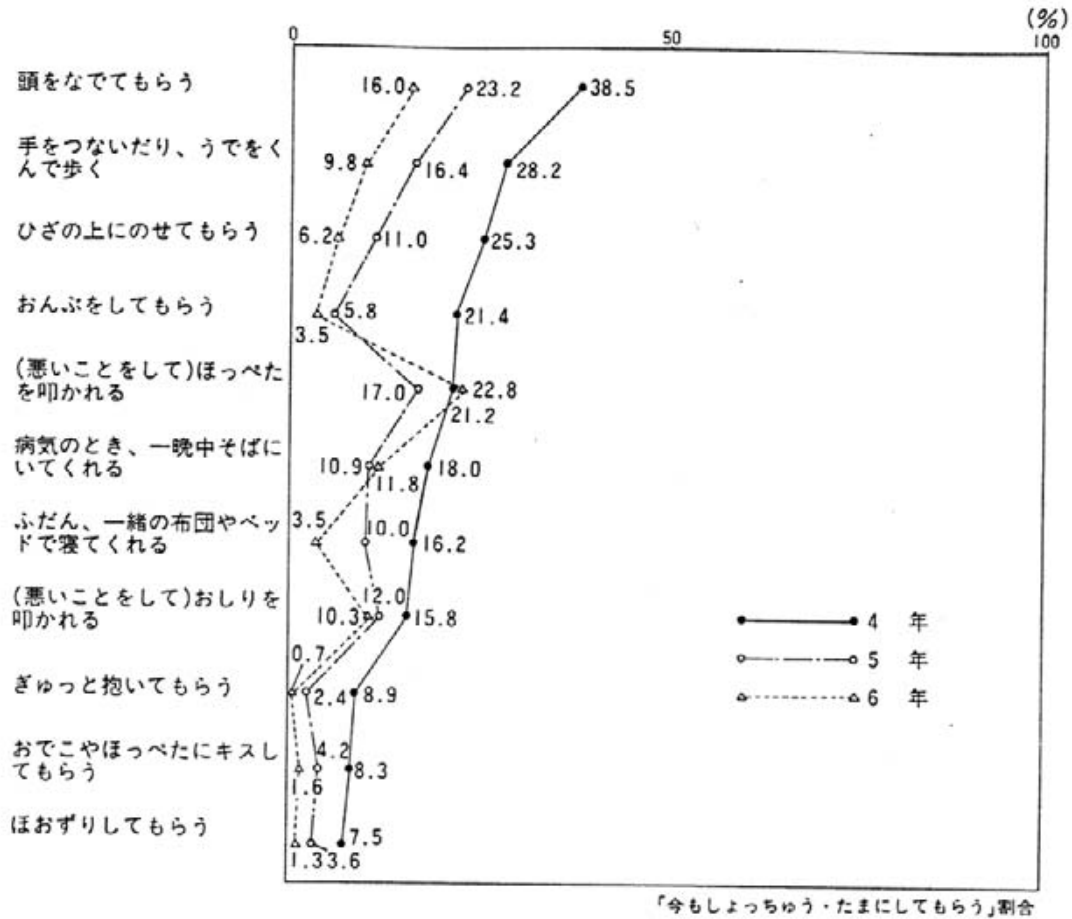


図12 父親とのスキンシップ×学年



3. 親から受けている世話



2 種類の世話

考えてみれば、親とはもともと子ども(赤ん坊)の世話をする必要性から作られているのだろう。動物学者のポルトマンの表現をかりれば「巢に座っている」無力なヒトの仔が、1人歩きし1人前になるまで、親はあれこれと世話をやく。その世話は初めは身体的な種類だが、後には心理的なケアのほうに重点が移され、やがてはその心理的ケアも少しずつへらされる。こうして子どもはおとなになるのである。

スキンシップに次いで、今度はこうした身体的・心理的な世話の部分のみてゆこう。

図13は母親と父親から受ける身体的な世話をみたものだ。最近では父親と母親の子どもへの接し方が非常に似てきたと言われるが、

この図でみるとスキンシップと同様、やはり母親からの世話のほうがはるかに多いことがわかる。

なお現在の様子に限れば、母親より父親のほうが多く世話をしているのは「一緒にお風呂に入る」(父親46%、母親26%、ただし、「今もしょっちゅう・たまにしてもらおう」をあわせて)、「背中を洗ってもらおう」(26%、18%)である。

次に図14は親からの心理的な世話である。図13と多少図示のしかたを変えてみたが、「おつかいに行く」「スポーツをしてくれる」以外は母親と父親との間でそれほど差がない様子がわかる。この点身体的な世話とは大きく違った傾向のようだ。

図13 親からの世話(身体的な世話)

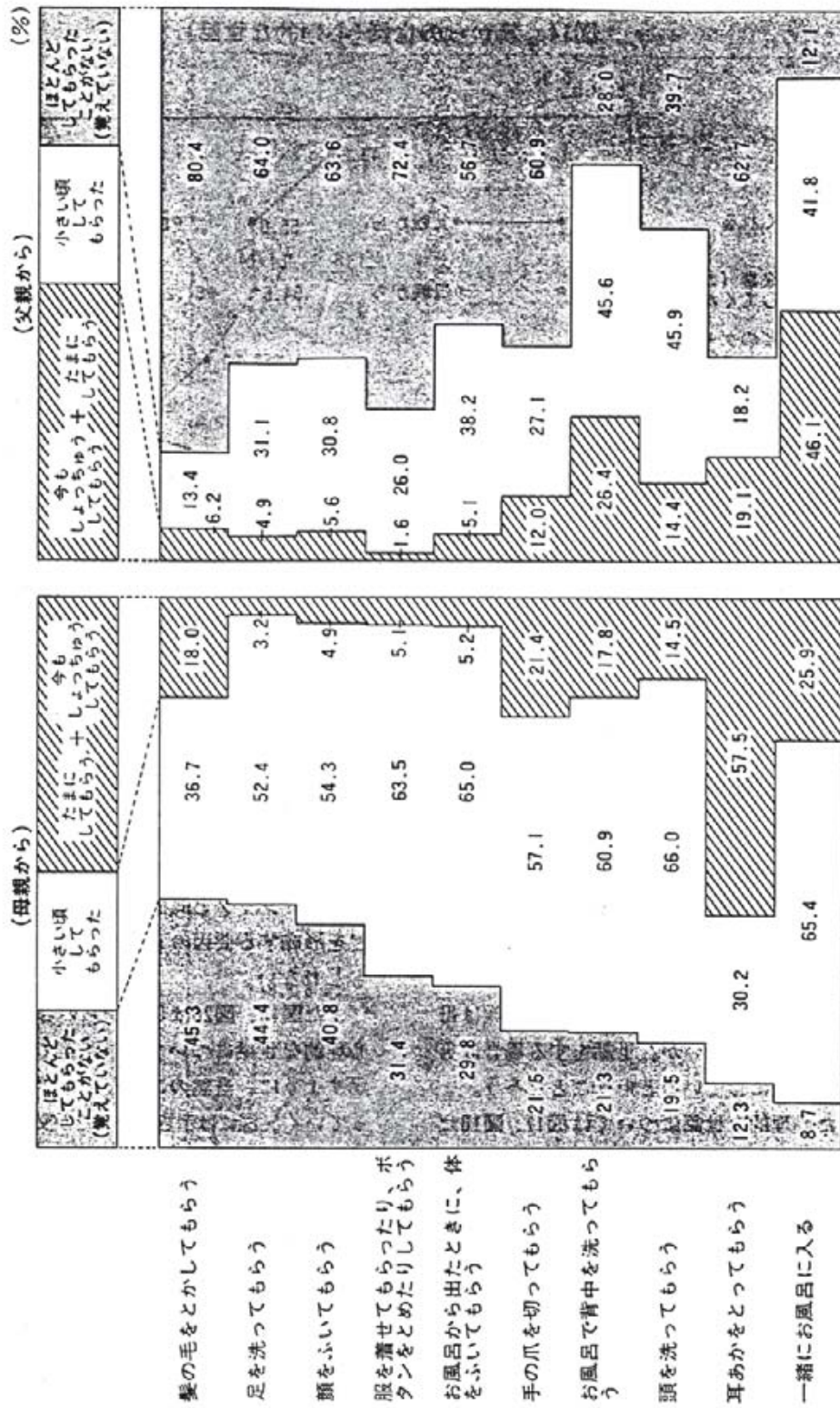
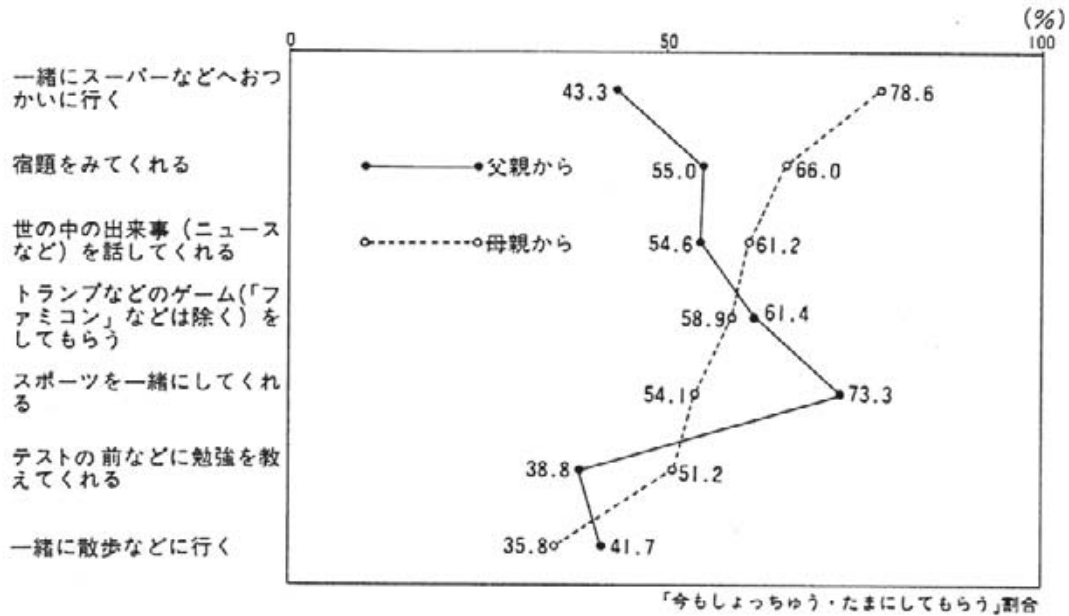


図14 親からの世話(心理的な世話)



性差と学年差

身体的な世話については図15、図16に示したように女子については母親から、男子についてはわずかだが父親からの世話が多くなっている。つまり身体的な世話をする父親は母親に比べると少ないが、世話をする場合は男子のほうにしているということだろう。

また心理的な世話については図17、図18に示したように、父親からにせよ母親からにせよ、より女子のほうが多く受けている。これ

もスキンシップと同様、女子の依存や甘えなどを形成する要因のひとつとなっているのかもしれない。

また図19、図20は母親からの身体的な世話、心理的な世話についての学年差である。図が示すように、当然のことながら学年と共にへって行く。図には示さなかったが父親の場合も同様である。

図15 母親からの世話(身体的な世話)×性別

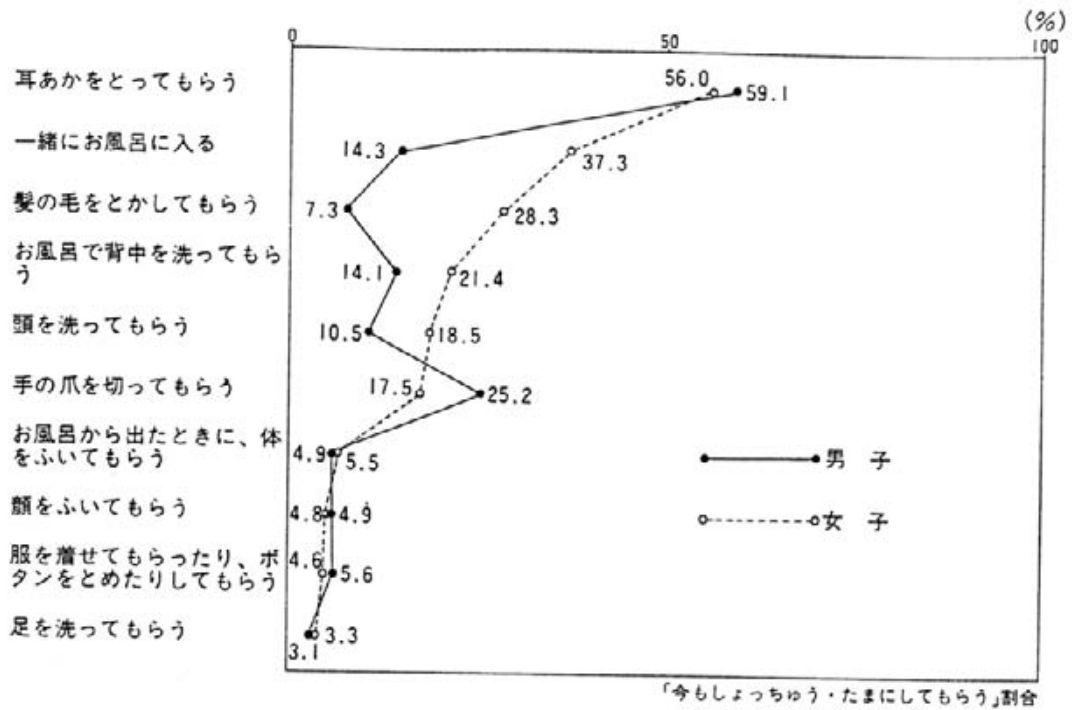


図16 父親からの世話(身体的な世話)×性別

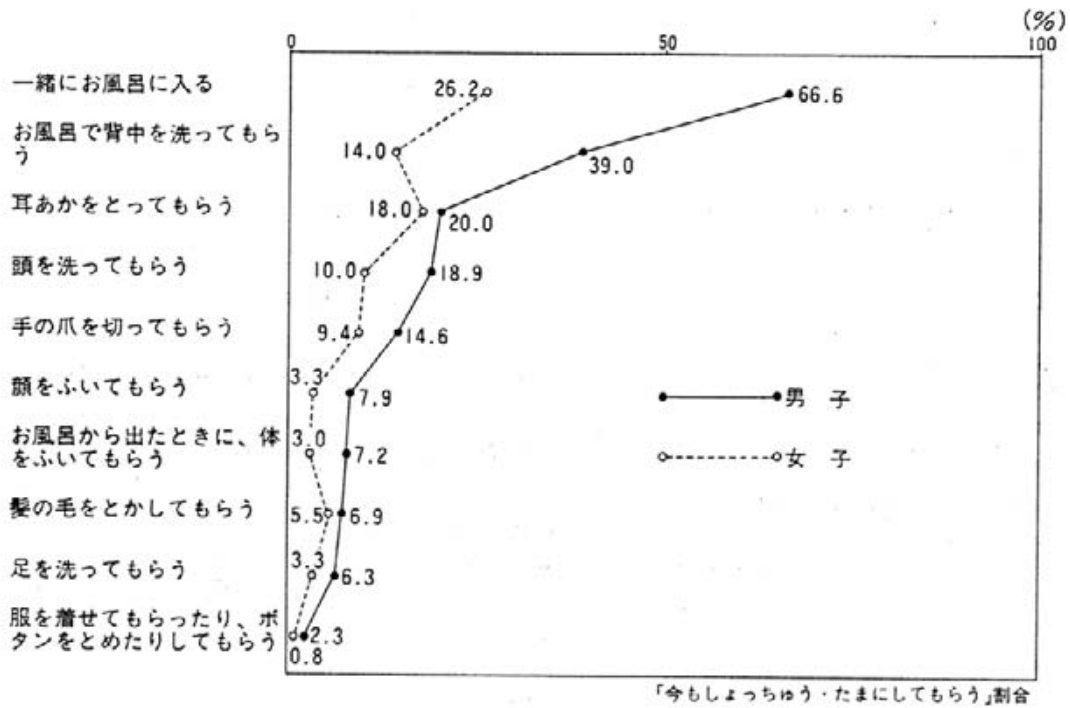


図17 母親からの世話(心理的な世話)×性別

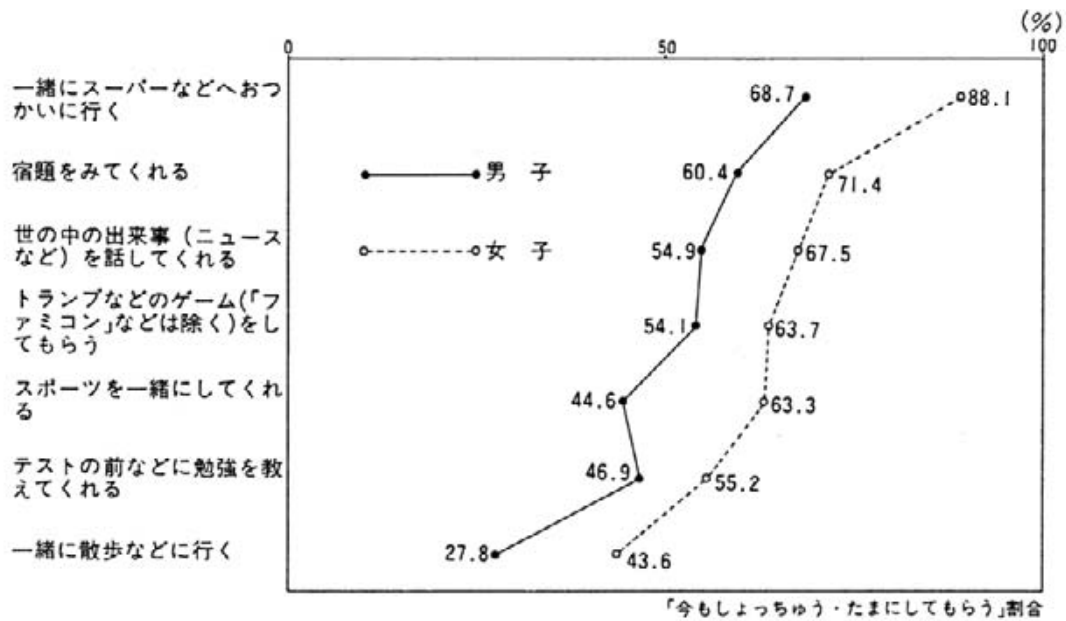


図18 父親からの世話(心理的な世話)×性別

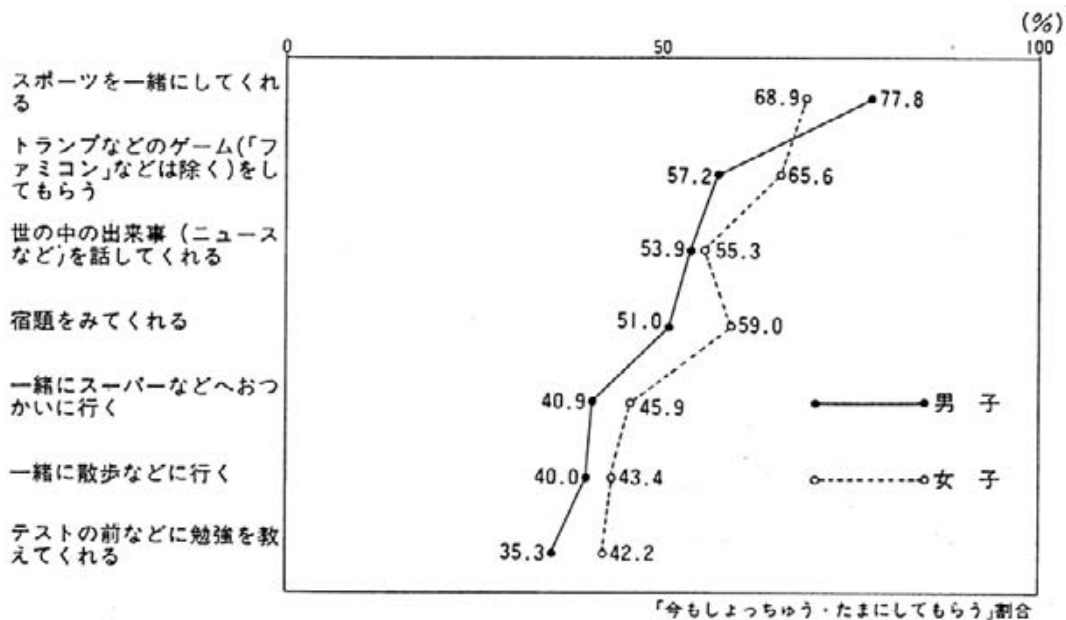


図19 母親からの世話(身体的な世話)×学年

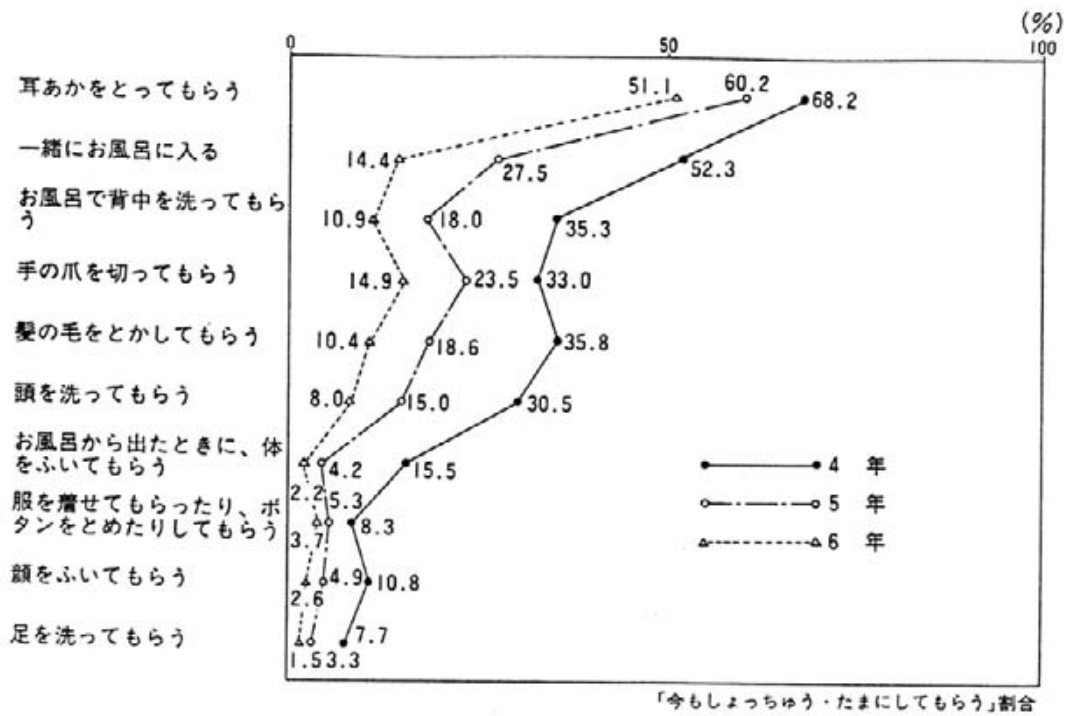
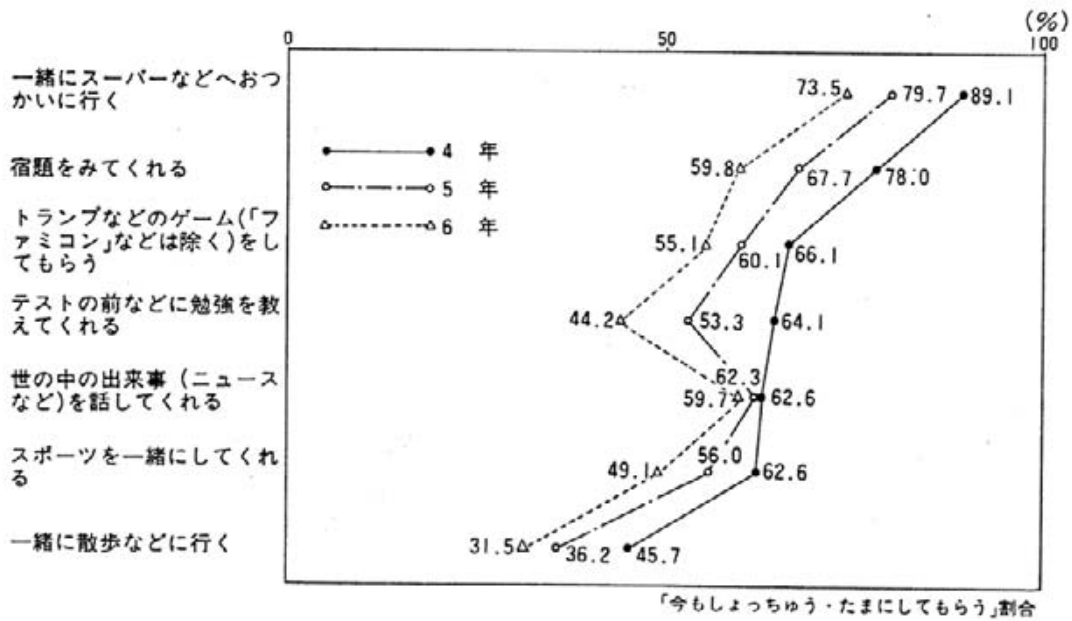


図20 母親からの世話(心理的な世話)×学年



4. 親への愛着



アタッチメント

心理学にアタッチメントという概念がある。人（もしくは動物）と他の人（動物）との間に結ばれている情愛のきずなをさし、たとえば赤ん坊なら、泣いたり、後を追ったり、笑いかけたり、人を呼んだりする行動がそれにあたる。むろん成長と共にそのパターンは変化していくものの、そうしたきずなが親との間に形成され続け、それが折々に表出される点には変わりがない。

その点を見ようとしたのが図21である。そ

れぞれの項目について、「いつも・わりとそう」の割合を示してある。先に親からのスキンシップも世話も、男子より女子が多く受けている様子を見てきたが、ここでも女子のほうがより親への愛着や依存を示す行動をしていることがわかる。

また図22に示したように、多くの項目ではやはり低学年ほどアタッチメントが強いようだが、差の少ない項目もある。

図21 親へのアタッチメント度×性別

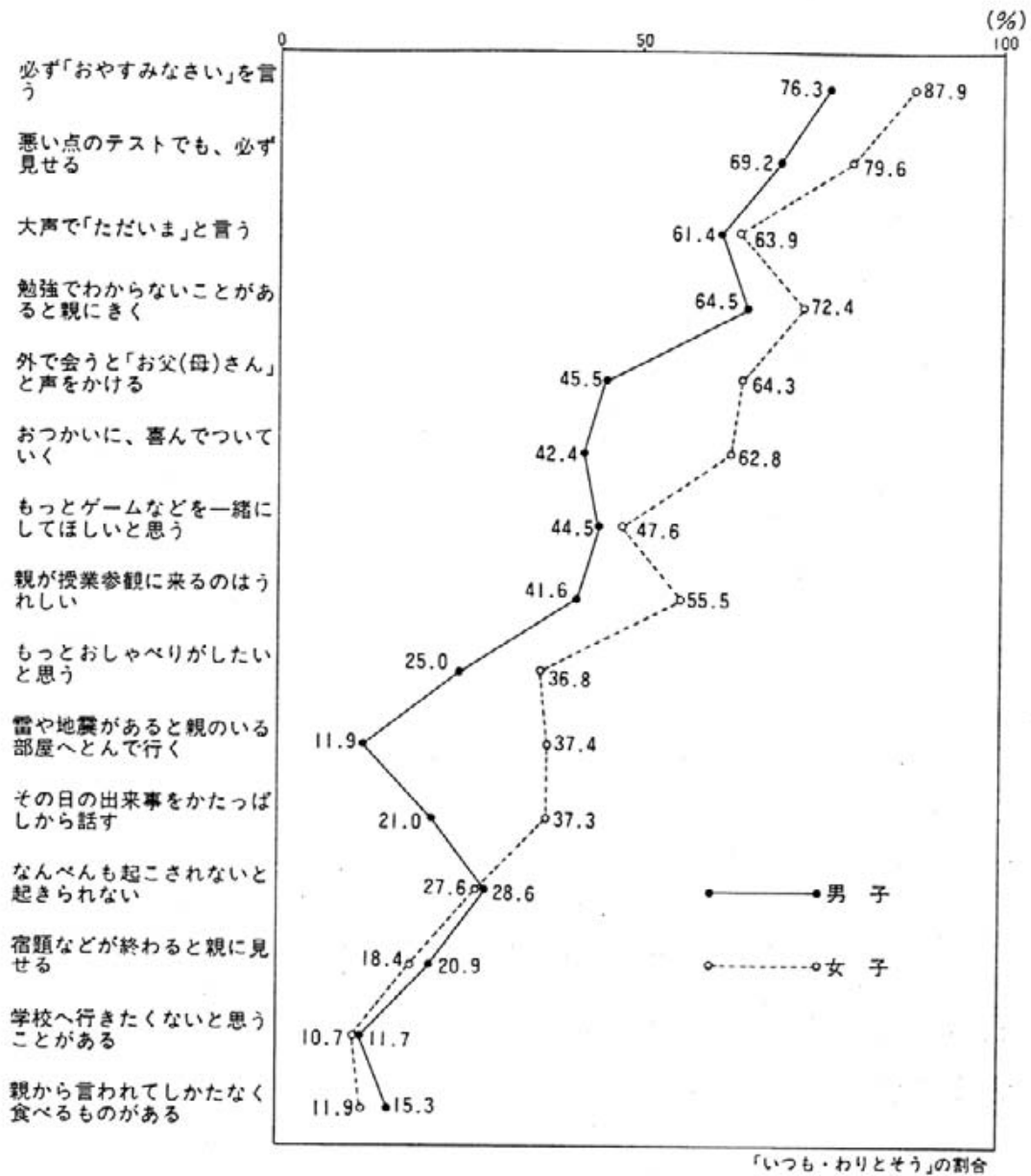
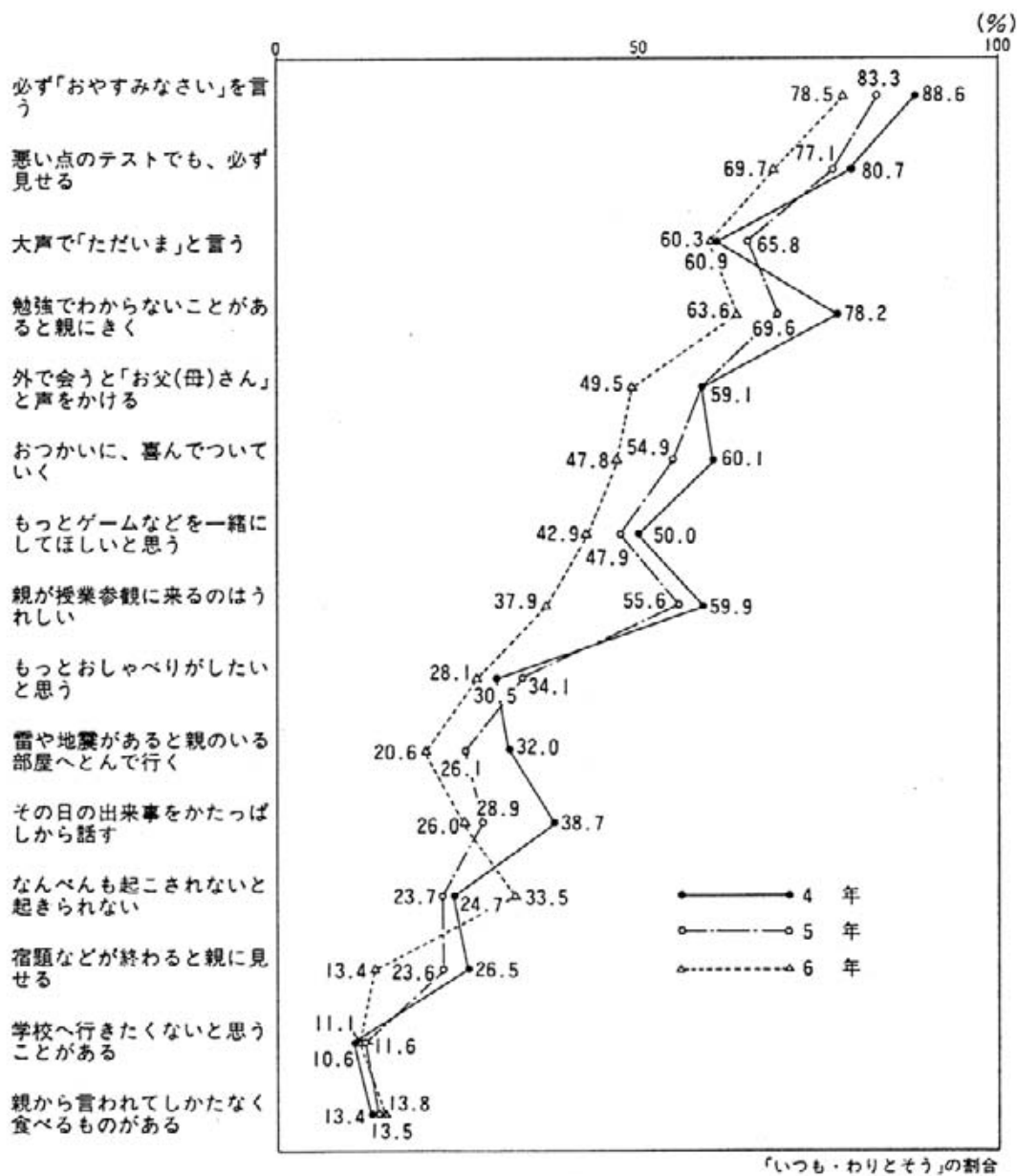


図22 親へのアタッチメント度×学年



何がきずなを作るか

こうしたアタッチメントは、どんな要因によって形成されるのだろうか。

表1で、それと関わりそうな条件をひろい

出してみた。(A)に掲げた項目は比較的純粋にアタッチメントと考えられる項目、いわば心理的側面の依存を、(B)は日常生活習慣の中で

表1-(1) アタッチメントの分析

	性 別	
	男 子	女 子
(A) アタッチメント		
外で会うと「お父(母)さん」と声をかける	45.5	(64.3)
おつかいに、喜んでついていく	42.4	(62.8)
もっとゲームなどを一緒にしてほしいと思う	44.5	47.6
親が授業参観に来るのはうれしい	51.6	55.5
もっとおしゃべりがしたいと思う	24.6	(48.9)
雷や地震があると親のいる部屋へとんで行く	11.9	(37.4)
その日の出来事をかたっぱしから話す	21.0	(37.3)
(B) 生活習慣の依存		
なんべんも起こされないと起きられない	28.6	27.6
学校へ行きたくないと思うことがある	11.7	10.7
親から言われてしかたなく食べるものがある	15.3	10.7
必ず「おやすみなさい」を言う	76.3	(87.9)
大声で「ただいま」と言う	61.3	63.9
悪い点のテストでも、必ず見せる	69.2	(79.6)
勉強でわからないことがあると親にきく	64.5	(72.4)
宿題などが終わると親に見せる	20.9	18.4

「いつも・わりとそう」の割合

の親への行動上の依存を示す項目とに分けて掲げている。

まず性別との関わりでは、先にみてきたように女子のほうにアタッチメントが強く、しかも生活習慣の側面より情緒的側面で、その傾向が見いだされる。

また、きょうだい中の位置との関係では、情緒的側面では、長子や中間子に多少その傾向

が強いが、末っ子や1人っ子は、それほどではなさそうだ。生活習慣の側面では、長子にその傾向があり、1人っ子も依存的である。とくに末っ子は、親から猫かわいがりされて甘えん坊になっているイメージがあるが、その傾向は見いだせない。しかし考えてみれば昔の末っ子は5人、7人きょうだいの末っ子だったが、今の末っ子は2人きょうだいの2

表1-(2) アタッチメントの分析

(%)

(A) アタッチメント	きょうだい			
	1番上 (弟・妹がいる)	まん中 (上・下ともいる)	末っ子 (兄・姉がいる)	1人っ子 (きょうだいがいない)
外で会うと「お父(母)さん」と声をかける	57.6	57.6	54.4	50.0
おつかいに、喜んでついていく	52.7	58.5	52.1	50.8
もっとゲームなどを一緒にしてほしいと思う	44.6	48.1	47.0	46.0
親が授業参観に来るのはうれしい	53.5	48.8	45.4	44.7
もっとおしゃべりがしたいと思う	34.4	31.6	26.6	33.8
雷や地震があると親のいる部屋へとんで行く	26.6	18.6	24.6	24.4
その日の出来事をかたっぱしから話す	28.4	36.8	27.3	29.3
(B) 生活習慣の依存				
なんべんも起こされないと起きられない	27.4	24.0	28.7	33.3
学校へ行きたくないと思うことがある	12.1	12.2	11.1	6.5
親から言われてしかたなく食べるものがある	10.0	17.2	15.3	14.5
必ず「おやすみなさい」を言う	86.3	82.1	79.0	81.6
大声で「ただいま」と言う	64.7	65.0	60.5	58.5
悪い点のテストでも、必ず見せる	77.5	71.1	71.9	78.4
勉強でわからないことがあると親にきく	71.6	63.2	67.7	66.4
宿題などが終わると親に見せる	22.4	20.4	16.8	28.5

「いつも・わりとそう」の割合

人め。つまり次男・次女なのであって、かえって長子よりしっかり育てているのかもしれないのである。

次に、母親が好きかどうかとの関連をみてみよう。表1-(3)が示すように、ほとんどの項目で「母親をとて好き」と言っている子のほうが、「それほど好きではない」子よりも、アタッチメントが強いことがわかる。生活習

慣的側面ですら、3つの項目以外は同じ傾向であり、つまり生活習慣が定着するかどうかの背後には、こうした情緒的關係も重要であることを示すのではなからうか。

また「自分を甘えん坊と思うか」では、すべての面で甘えん坊という自己評価がアタッチメントと関わっていることも見いだされる。

表1-(3) アタッチメントの分析

(A) アタッチメント	母 親 が		自分を甘えん坊と	
	とても好き	それほどでない	とても・わりと思う	思わない
外で会うと「お父(母)さん」と声をかける	65.1	28.4	64.0	46.1
おつかいに、喜んでついていく	61.4	29.7	60.3	44.6
もっとゲームなどを一緒にしてほしいと思う	48.5	36.5	53.1	41.7
親が授業参観に来るのはうれしい	59.2	20.7	61.7	40.9
もっとおしゃべりがしたいと思う	36.8	15.4	43.9	24.1
雷や地震があると親のいる部屋へとんで行く	30.1	9.5	43.2	14.6
その日の出来事をかたっぱしから話す	35.4	13.2	39.8	24.8
(B) 生活習慣の依存				
なんべんも起こされないと起きられない	26.5	31.4	40.0	23.4
学校へ行きたくないと思うことがある	9.9	17.0	15.8	9.8
親から言われてしかたなく食べるものがある	11.6	17.7	19.6	10.0
必ず「おやすみなさい」を言う	87.7	64.2	85.0	78.4
大声で「ただいま」と言う	66.7	51.1	67.0	61.0
悪い点のテストでも、必ず見せる	79.3	58.4	78.3	70.7
勉強でわからないことがあると親にきく	74.1	46.6	76.7	62.4
宿題などが終わると親に見せる	22.4	13.5	27.4	18.5

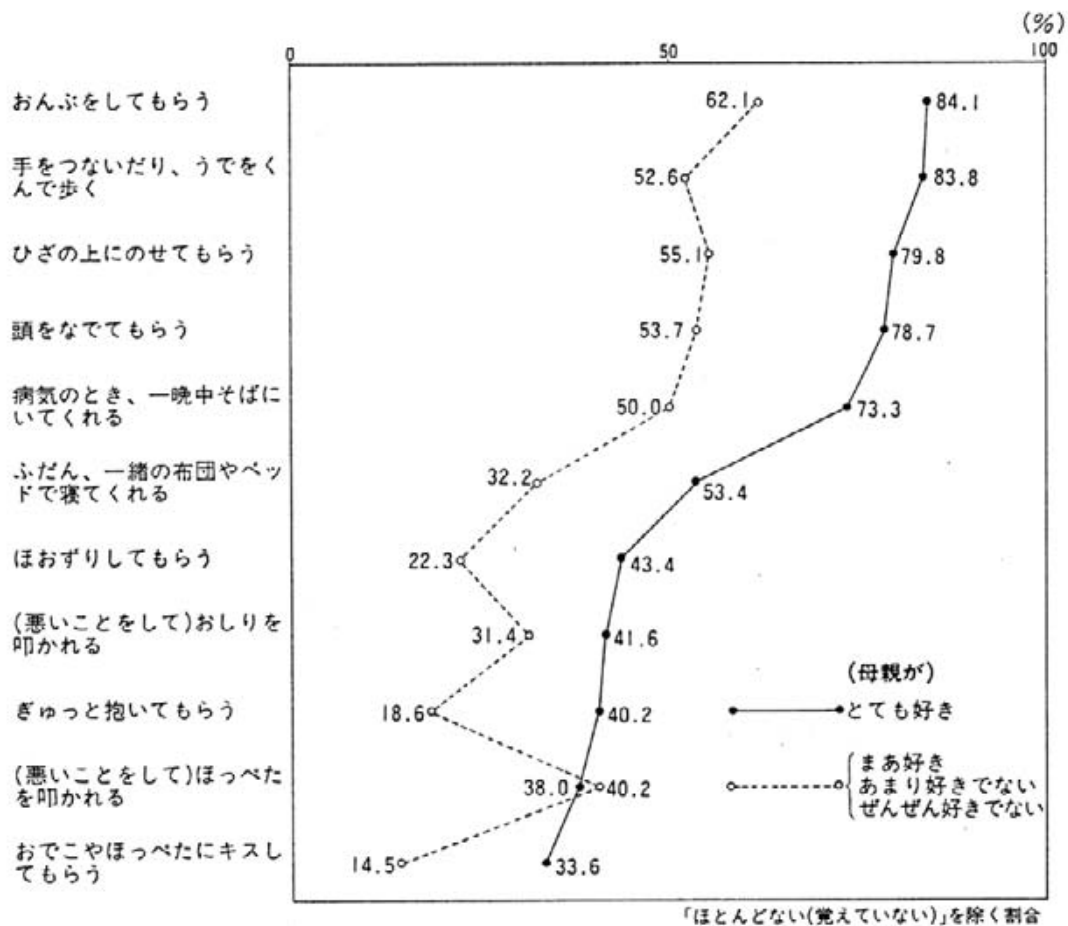
「いつも・わりとそう」の割合

スキンシップ、親からの世話との関わりで

「母親（父親）を好き」という感情が、親への愛着や依存を示す行動として日常に表出される傾向をみてきたわけだが、むしろ「母親を好き」という感情は、親から受けるスキ

ンシップや世話から生まれてくる部分も大きいのではないかと。親から子どもへの→という矢印が、母親を好きという感情を生み、それが逆に子から親への愛着の矢印を生み、そ

図23 母親とのスキンシップ×母子関係



れが親⇌子という相互作用の下で親子関係という信頼と愛情にみちた人間関係を生ずるのではなからうか。

この点を見ようとしたのが図23から図28までである。母親(父親)が好きな者は、そうでない者に比べ、より多くのスキンシップと世話を受けている。ただし、こうしたスキンシップや世話は必ずしも現在でなくてもより幼い段階で多くの経験をもったことが大切かも知れない。

また図29は、スキンシップと世話との関わりである。「母親と手をつないで歩いた経験のない者」に例をとると、経験のない子は母親から身体的な世話をしてもらった経験も非常に少ない。世話とスキンシップ、そして、その対象を好きと感ずる感情は表裏一体であることがわかる。この点は図30のスキンシップとアタッチメントとの関わりをみた図でも同様である。

図24 母親からの世話(身体的な世話)×母子関係

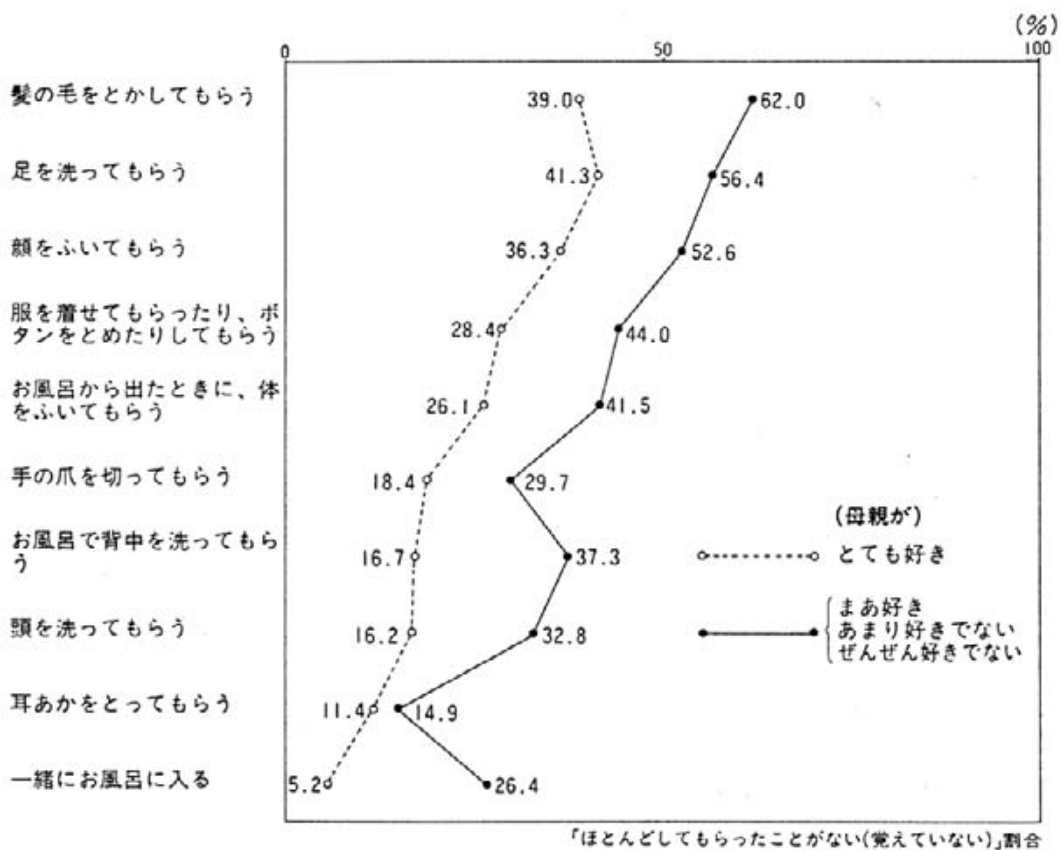


図25 母親からの世話(心理的な世話)×母子関係

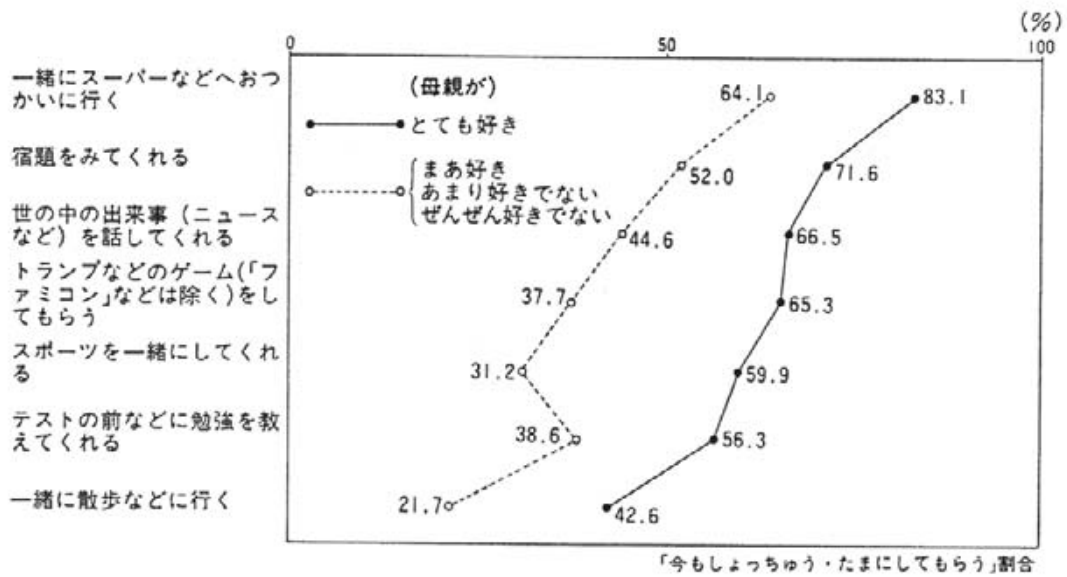


図26 父親とのスキンシップ×父子関係

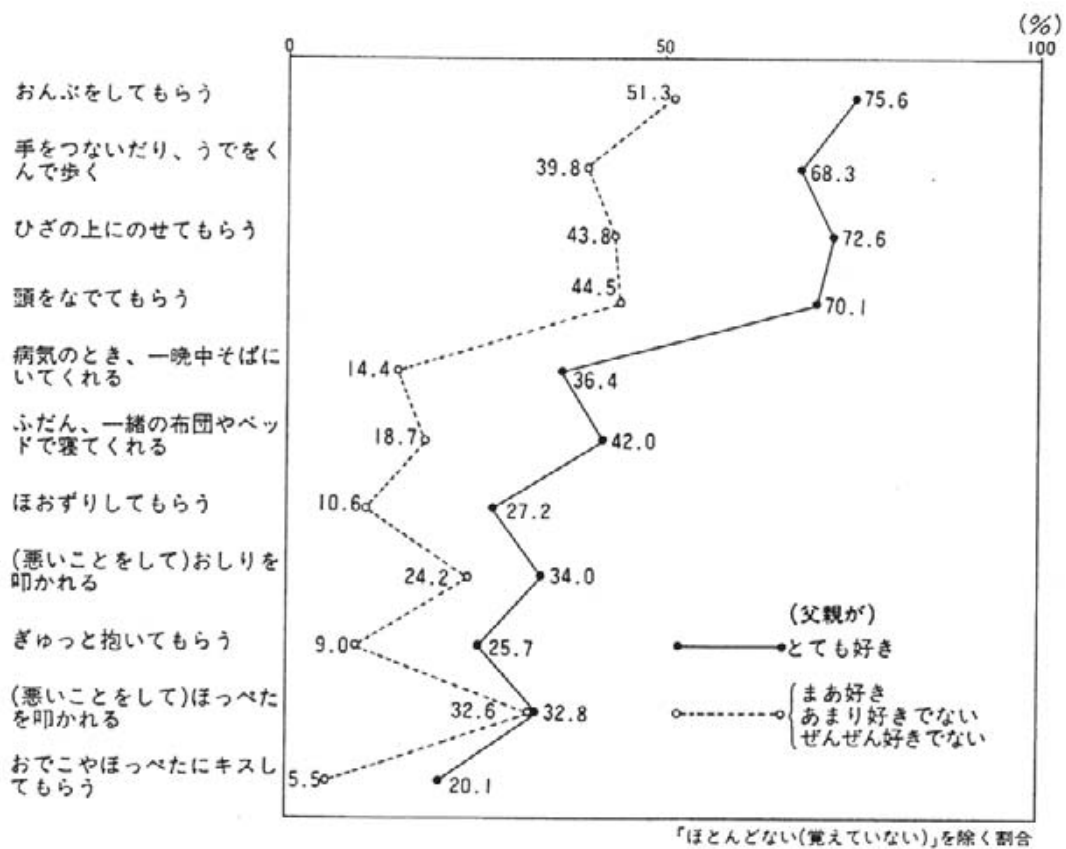


図27 父親からの世話(身体的な世話)×父子関係

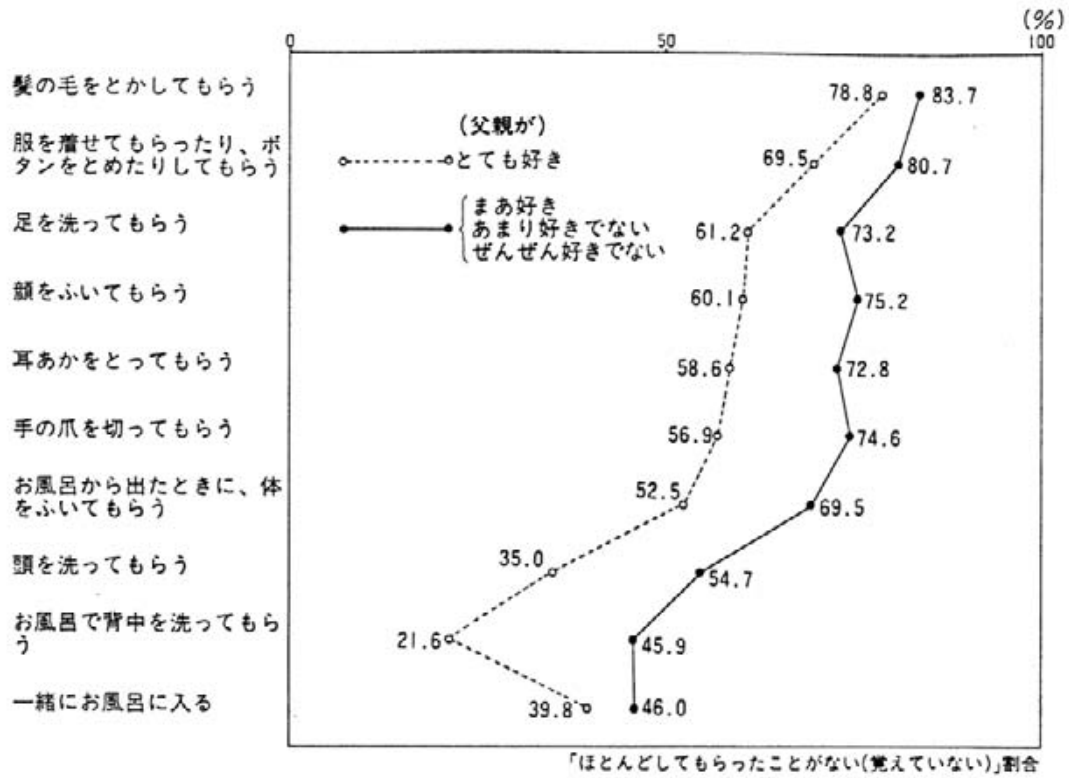


図28 父親からの世話(心理的な世話)×父子関係

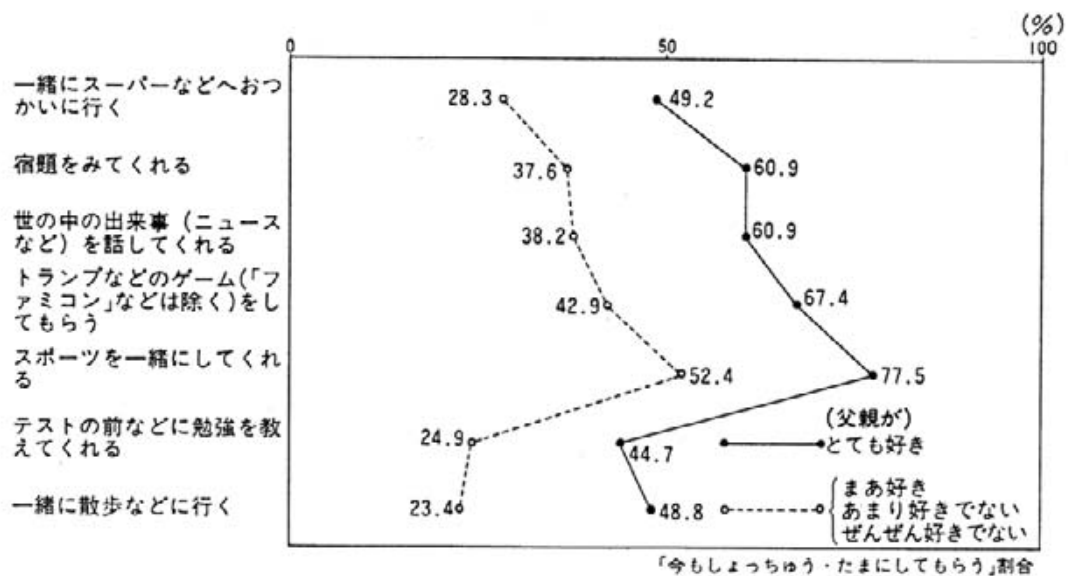


図29 母親からの世話×母親とのスキンシップ(手をつないで歩く)

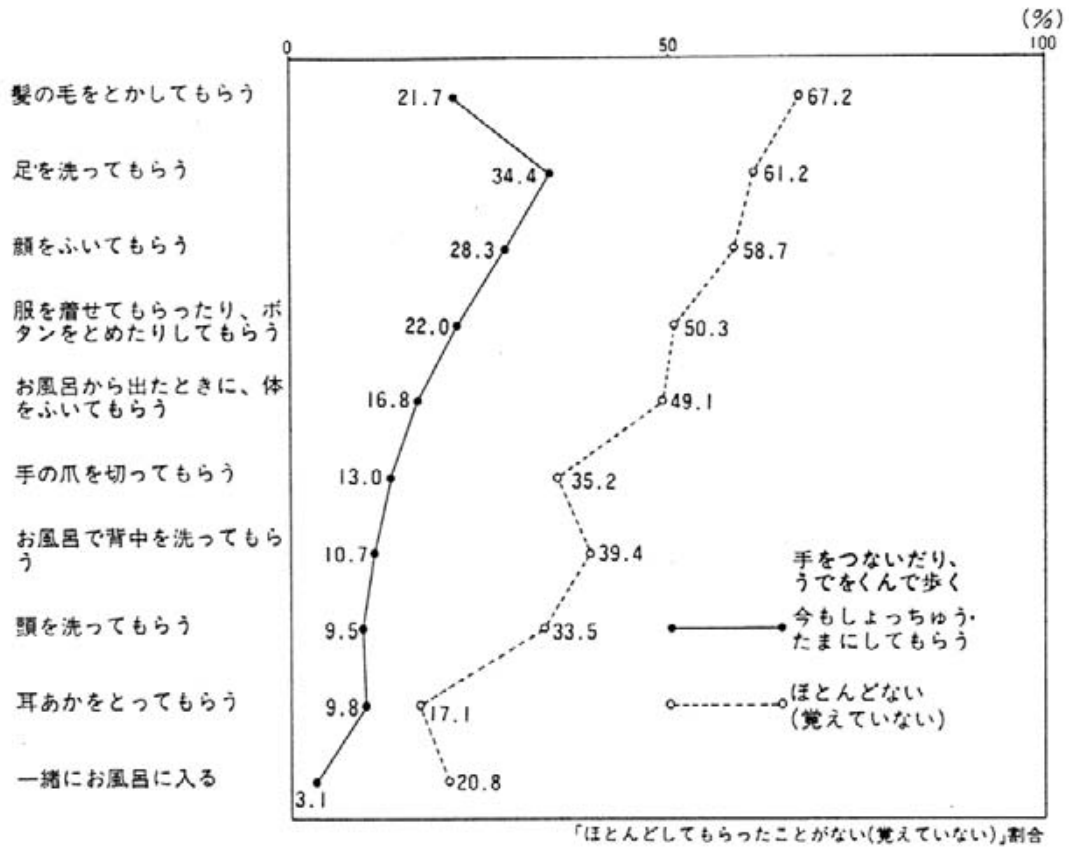
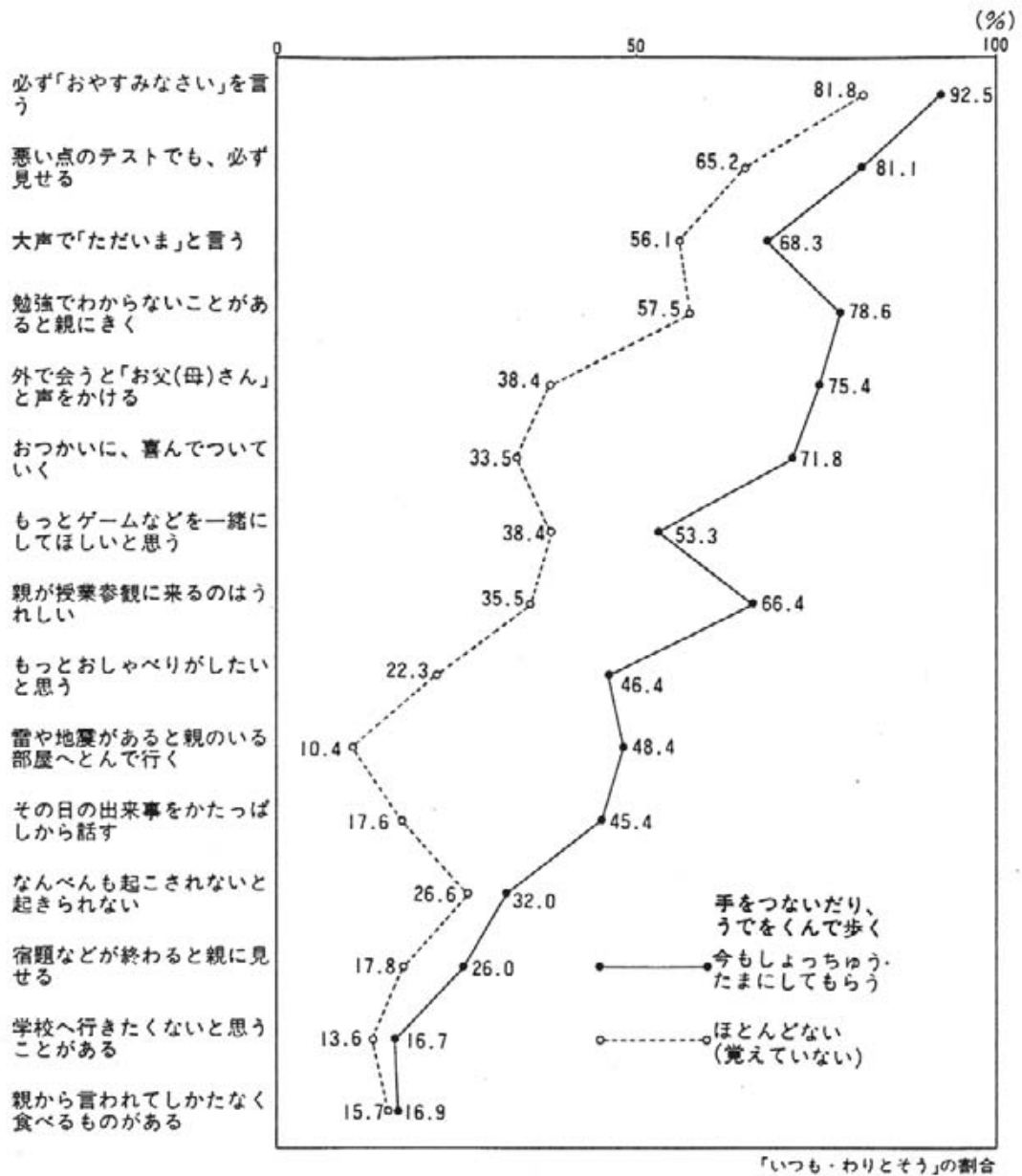


図30 親へのアタッチメント度×母親とのスキンシップ(手をつないで歩く)



5. 子どもの成長欲求との関わりで



スキンシップや身体的・心理的世話を介して、親への愛着が形成される状況をいくつかの角度からみてきたわけだが、こうした愛着は子どもの社会的・心理的自立とどう関わるのだろうか。むろんこの大きなテーマをここでとり扱うには、データも紙面も残されていない。しかしこのレポートの初めの部分でわれわれは、子どもたちの自己像がどこかひ弱で成長欲求も乏しい様子を見てきている。この成長欲求の分析は、またいつか機会をみてと思っているが、ここでは、すでに扱ってきたスキンシップや親からの世話が、成長欲求とどう関わるのかを分析して本レポートの締めくくりとしたい。

まず表2はスキンシップと成長欲求との関わりである。図が示すように、成長欲求の弱い者（幼児期に退行したがっている者）は、母親とのスキンシップ体験が多い傾向がうか

がわれる。同様にして表3でも、幼稚園時代に戻りたい子のほうが、現在心理的な世話をより受けており、また同様に表4によれば親への愛着や依存を示している傾向が見いだされる。

ただし、そうした過度のスキンシップや世話が子どもを心理的に退行させ成長欲求を抑えるのか、逆に退行的な子どもがいつまでもスキンシップや親からの世話を受け入れるのかは、明白ではない。おそらくは、その両方の作用が働くものと思われるが、このことは逆にわれわれに子どもを育てる作業のむずかしさを痛感させる。

親と子どもの間は密月からスタートしなければならないが、いつまでも密月であってはならない。最愛のわが子が自分を見棄て、自分をふみ越えて巣立っていくように育てなければならぬとは、親たる者に課せられた仕事とは、なんと重く、むずかしいものだろうか。

表2 母親とのスキンシップ×おとなになりたいか

(%)

	おとなになりたいか		
	できれば幼稚園の頃に戻りたい	いつまでも今ぐらいの子どもでいたい	早くおとなになりたい
おんぶをしてもらう	74.2	80.7	77.7
手をつないだり、うでをくんで歩く	83.2	78.5	73.9
ひざの上のせてもらう	80.2	75.2	71.1
頭をなでてもらう	81.2	74.0	69.4
病気のとき、一晩中そばにいてくれる	69.1	68.8	67.0
ふだん、一箱の布団やベッドで寝てくれる	52.5	47.7	46.4
(悪いことをして)ほっぺたを叩かれる	35.4	37.6	43.8
(悪いことをして)おしりを叩かれる	43.3	40.9	34.9
ほおずりしてもらう	43.6	36.9	33.3
ぎゅっと抱いてもらう	40.7	35.1	30.6
おでこやほっぺたにキスしてもらう	29.9	27.3	27.9

「ほとんどない(覚えていない)」を除く割合

表3 母親からの心理的な世話×おとなになりたいか

(%)

	おとなになりたいか		
	できれば幼稚園の頃に戻りたい	いつまでも今ぐらいの子どもでいたい	早くおとなになりたい
情緒にスーパーなどへおつかいに行く	83.7	76.9	77.1
宿題をみてくれる	68.3	63.4	67.3
トランプなどのゲーム(「ファミコン」などは除く)をもらう	62.4	57.1	59.3
スポーツと一緒にしてくれる	59.6	53.9	50.8
世の中の出来事(ニュースなど)を話してくれる	61.1	63.5	59.5
テストの前などに勉強を教える	51.6	50.6	51.3
一緒に散歩などに行く	38.2	37.5	32.9

「今もしょっちゅう・たまにしてもらう」割合

表4 親へのアタッチメント×おとなになりたいか

(%)

(A)	おとなになりたいか		
	できれば幼稚園の頃に戻りたい	いつまでも今ぐらいの子どもでいたい	早くおとなになりたい
外で会うと「お父(母)さん」と声をかける	58.3	> 55.0	> 53.1
おつかいに、喜んでついていく	57.1	> 51.4	= 51.4
もっとゲームなどを一緒にしてほしいと思う	56.8	> 40.5	< 45.3
親が授業参観に来るのはうれしい	52.9	> 48.1	> 46.9
もっとおしゃべりがしたいと思う	37.2	> 26.1	< 31.2
雷や地震があると親のいる部屋へとんで行く	16.6	< 23.7	< 24.3
その日の出来事のかたづけから話す	31.7	> 27.1	< 29.7

(B)

なんべんも起こされないと起きられない	30.2	> 27.7	> 26.6
学校へ行きたくないと思うことがある	17.7	> 8.1	< 10.1
親から言われてしかたなく食べるものがある	16.6	> 13.3	> 11.7
必ず「おやすみなさい」を言う	82.2	81.0	82.9
大声で「ただいま」と言う	64.2	62.7	61.2
悪い点のテストでも、必ず見せる	76.6	< 77.0	> 70.8
勉強でわからないことがあると親にきく	70.8	> 69.7	> 66.0
宿題などが終わると親に見せる	22.4	> 17.6	< 20.0

「いつも・わりとそう」の割合

※おことわり：本文中に使用した写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。